

2011年12月10日(土)

北海道大学・スラブ研究センター大会議室

SRC プロジェクト型共同研究「ロシア連邦・トゥバ共和国および台湾に保存されているトゥバ古地図のデータ化に向けての基礎調査」中間成果報告

「18世紀シベリア図：イェニセイ河上流域より見た、境界領域での近代地図変遷」

等々力 政彦

(トゥバ民族音楽家)

18世紀、それまで伝承と想像を多く含む虚実半ばしていた地図は、地図の需要の高まりと、それと呼応して世界の隅々から実測図が報告されるようになったことから、一気に現代地図の近傍へ急接近することとなった。地図の歴史の中では、画期的な世紀といつてよいであろう。ユーラシア大陸の中央部に位置し、アクセスの難しかったイェニセイ河上流域もまた同様であった。歴史上、イェニセイ河上流域を地図に載せる先鞭をつけたのは14世紀の元朝中国であったが、17世紀まではほとんど更新されないままであった。その状況を打破したのはロシアで、18世紀前後からまとまった地勢と地名が加えられはじめ、18世紀前半には初めて正しい地勢が地図に書き込まれた。さらに18世紀後半になると、清朝中国によって、かなり詳細な地名が盛り込まれた地図が作製された。このような情勢の中、遊牧領主たちを中心として、遊牧民自身の領土地図が出現してきた。当時の勢力状況では、地図のための基礎調査に単に技師を派遣するという事は難しく、現地の遊牧領主たちとの協力は必須であったと考えられる。18世紀の地図を比較すると、互いに影響しあつては書き換えられるといった、「対話」を行いながら地図が変化していった跡をみることができる。イェニセイ河上流域は、ロシアと中国、遊牧民と定住民、テュルク語系言語・モンゴル語系言語・南サモイェード語系言語・ケット語系言語、ハルハ勢力とオイラト勢力など、さまざまな力が重層的に拮抗する境界領域であった。それに、清朝中国での地図製作を大きく進展させたヨーロッパ人宣教師と、彼らの情報網も加わっていた。上記のような状況の中で、イェニセイ河上流域の18世紀地図が、動的に塗り替えられてゆく過程を概観する。